

6日夕刻、広島平和記念公園そばの元安橋のもと。柔らかな光に浮かぶ影絵の前に人だかりがあった。

毎年8月5、6日に開かれる「小さな祈りの影絵展」。被爆前と今の広島を描いた作品一つ一つに平和への願いが込められている。

「学校で受けた平和教育を自分なりに咀嚼して、今の活動につなげています」

学生団体「影絵ユースワークショップ」の代表を務める広島女学院大4年、森長蓉子さん(22)は、広島市安芸区IIはそう話した。

広島は戦後、被爆地として積極的に平和教育に取り組んできた。

それだけに、2010年に市が小中高生に実施した意識調査の結果は教

平和教育「次の段階に」

育関係者に衝撃を与えた。原爆投下の年月日を問う設問。「1945年8月6日午前8時15分」



と答えられた小学生は、わずか33%だった。

元小学校教諭で、当時市教委にいた比治山大現代文化学部准教授の森川敦子さん(53)は「平和教育は次のステージに進む必要に迫られた」と感

じた。

従来は被爆の実相を知ること重点を置いてきたが、学校によって力の入れ方に差があり、「受け身、一面的」との批判もあった。市教委は森川

次代への継承

さんらを中心に2012年、「平和教育プログラム」を策定。小学校低学年から高校生まで年代ごとの教材を作るなど新たな取り組みを始めた。

森川さんは「広島の子どもたちは『継承と発信』の役割を担っている。国内外で活躍できる子どもが育ってほしい」と願う。本県の県立高はほぼ全

過去学び未来に発信へ

校が広島、長崎、沖縄のいずれかを修学旅行で訪れ、現地で講話を聞く。それを「平和教育」としている。被爆地から遠く離れた本県の教育現場に、広島ほどの「熱はない。宇都宮空襲の日付をどれだけの子どもたちが言えるのだろうか」。ふとそんなことを考えた。

ただ、変化もある。ことはは中学生派遣事業で10市町から過去最多の187人が8月の広島を訪れた。宇都宮市は戦後70年の昨年、宇都宮空襲の概要をまとめた冊子を小学6年生に初めて配布。投下された焼夷弾の小中学校への貸し出しも始めた。同市教委の担当者

は「子どもたちに過去をきちんと伝えたい」と話している。森長さんはそう感

「私たちが若い世代は、被爆当時の時代に思いをはせること自体、難しくなっている」。影絵制作で、平和教育の重要性をに当たり、中高生とも触れ合う機会を再認識した。



影絵を紹介する「ユースワークショップ」のメンバー。代表の森長さんは「平和教育を自分なりに咀嚼した活動」と捉えている＝広島市中区